

糸が切られた人形みたく、十悟じゅうごの身体は一回転しながらに濃淡なアスファルの上へと倒れ込む。

「ああ……ああ……ああッ！」

夕星ゆうせいは数秒の間を立ち尽くしてしまった。目の前で起こったワンシーンの意味を理解しなかったのだ。

けれど、目の前に広がるノンフィクションはそれを許さない。

「クソッ！ クソッッ！ 何だっつんだよ!？」

我に返った夕星は咄嗟に彼の傷口を抑えるも、意味を為さない。熱を持って流れ続ける血液に反し、悪友の身体はどんどん冷たくなってゆく。

「……ふざけんよッ」

噛み締めた奥歯からは軋むような音がした。

真っ赤に染まってしまった拳を握りしめ、ボソリとは呟く。

「なあ、〈エクステンド〉もう一度俺に力を貸してくれよ……友達の仇を取りたいんだ」

伸ばされた掌は二人を庇護するようだった。

夕星は瀕死の重体を負った悪友を抱き締めながらに、再びコックピットへと身を委ねる。そして、ヘッドセットを装着し――

「お前が何処の誰かなんて知らねえし、興味もねえ……だけどな、十悟をやりやがったことだけは許さねえッからな！」

カメラアイをズームして、皓しろい閃光が迸った方へと視線を遣った。

数一〇〇メートル先の色彩と画質のブレを修正。その仇敵の姿を脳内へ焼き付けようと、瞳を凝らす。

だが、ソイツの姿は自分の想像から遠く駆け離れたものであった。

あの閃光の正体は何なのか？ 恐らくは遠距離狙撃銃スナイパーライフル辺りであろうと夕星は当たりを付けていた。

やや現実感に欠ける話かもしれないが、〈エクステンド〉のようなオーバーテクノロジーが存在しているのだ。もし仮に、ソイツがビルライフルのような獲物を所持していたとしても少し驚かされる程度で済んだのだろう。

しかし、夕星は自らの瞳を疑うこととなる。

「木の杖だと……!？」

それはある種、工学技術の体現とも言える（エクステンド）とは対を成すようなものだった。先端に宝石が嵌められ、金属やリボンで仰々しい装飾が成されていたそれはまさに、「魔法の杖」というのが称するのが相応しい。

（エクステンド）と対を成すのは、何も杖だけじゃなかった。それを握りしめるソイツもまた夕星の想像を超える風貌をしているのだから。

細身のシルエットからして、女性であることは間違えない。だが、からすば鳥羽のようなローブを羽織り、三角帽を目深に被る彼女の姿はどう見たって、「魔女」と形容する他ない。

「んだよ……なんだってんだよ、そのふぎけた格好はッ!!」

吠える夕星に反して、（エクステンド）のセンサーは過度な熱源と、メルマ現実固定定数の急激な変動を感知する。

魔女が握りしめた杖の先に現れるのは、複雑怪奇な魔法陣と光球だ。きっと次弾を装填しているのだろう。

「上等だッ……!!」

彼女の纏うローブと帽子の鍔がバサバサと靡く。そして、ほんの一瞬。——彼女の歯車のような瞳孔が露わとなった。

「なっ……」

夕星はこの現状を、ほとんど理解できていない。

言葉を話す怪獣に、砂から復活した（エクステンド）。それに覆い被せるように、今度は正体不明の魔女が現れたのだ。

データラメで過剰積載な一部始終は、まるで熱に侵された際に見る夢か、はたまた稚拙な空想がぐちゃぐちゃに混ざり合っているようであった。

ただ、夕星は半ば直観で言葉を紡ぐ。

「お前もあのノイズまみれの声が言ってた、エゴシエーターって奴なのか」

魔女が閃光を撃ち放った。

まるで「次は外さない」と言いたげに、光は直進する。

「ッッ……応える気はねえってのかよ!」

ならば、夕星も願うだけだ。

辺りの一切合切を砂に変え、（エクステンド）の背後に創造されるのは一対の電磁砲レールガンだった。

「パルス充電ッ! 一二〇パーセントッ!」

機体に蓄えられた電力によって、砲内部に仕込まれた弾頭を加速。

紫電をまもって撃ち出されたそれは、魔女の閃光を相殺してみせる。

「まだだッ!」

夕星は撃ち切った一門をすぐに捨てる。そして、残るもう一門へと機体の電力を回した。

魔女も口を開き、何かを呟いている。閃光の威力を上げようと、呪文でも唱えているのか？  
だが、後生憎だ。次弾の装填が先に完了するのは、〈エクステンド〉である。

「パルス充電……八〇、九〇、一〇〇！」

夕星の懐へと力無く倒れ込んだ十悟の制服は赤を超えて、ドス黒く汚れていた。

正直に言おう。今だけはエゴシエーターだとか、魔女だとか、〈エクステンド〉だとか、そんなことはもう如何だつていいと思えた。——今はただ、烈火のように湧き上がるこの怒りを敵にぶつきたいのだ。

「充電完了ッツ！ これで終わりだア！！」

夕星はトリガーへと指先をかける。

だが、それが引き絞られることはなかった。

「待て……待ってくれよ、エクステンドッツ！」

〈エクステンド〉の巨体が消えてゆく。しかも今度は砂塵に戻るのではなく、光の粒子に分解されたのだ。

ヘッドセットに表示されるのは「転送中」の三文字のみ。

「俺はまだアイツを倒してねえんだッ！ せめて、友達の仇くらい打たせてくれよ！！」  
〈エクステンド〉に願いを叶える力があると言うのなら、この願いを聞いて欲しかった。

陽真里ひまりを助けられるだけの力が欲しいと願ったときと何が違うのか？ その答えを見つけれぬまま、夕星の身体もまた光と化して溶けてゆく。